

平成 28 年度しらゆり会総会 あいさつ

金沢大学教育担当理事・副学長
柴田正良
平成 28 年 5 月 15 日

ただ今ご紹介に与りました、金沢大学教育担当理事・副学長の柴田と申します。本日は、金沢大学しらゆり会の平成 28 年度総会にお招きいただき、まことに有難うございました。しらゆり会の皆さまには、平素から、本学医学類学生の教育に関して多大なる貢献をして頂き、心からお礼申し上げます。

以前から、本学においても医学教育の不可欠の一環として人体に関する実地の解剖学実習があり、その教育に文字通り自らの身を捧げる尊い意志を持った方々がおられるということは、私も知識としては承知しておりました。しかし、この度、「しらゆり会」という名をはっきりと眼にし、その活動を間近に知ったことは、恥ずかしながら、私にとりまして少なからぬ衝撃でした。

私ごとで大変恐縮ですが、私が専門としております哲学の分野で、私の立場は物理主義というものです。これは、一言で言えば「政治的なイデオロギー抜き唯物論」のようなものですが、それは、「世界のすべては物理的なものからできている、したがって、霊魂や魂や心といったものも物理的な支え、昨今では脳の活動ということになるのでしょうか、それなしには存在しえない」と主張するものです。すると、脳を含めた身体全体に死が訪れたときには、霊魂や魂や心はどうなるのでしょうか？ それらもまた支えを失って無になる、存在しなくなる、ということになり、それを私は受け入れなければなりません。

その上、死後の私の身体はただの物体なのだから、道具と同じように世界に大きな「効用 utility」をもたらす方法でそれを「利用する」のは大いに理に適っている。私がさらに功利主義者、utilitarian でもあったなら、この理屈には従わないわけにはいきません。しかし、私は脳死の際の臓器提供は約束しているものの、献体には、無意識のうちに近づかないようにしていました。

聞くとところによれば、ヨーロッパには初期の解剖遺体にまつわるおぞましい歴史があり、それが、遺体の提供は「見返りを求めない自発的な意志」に拠らねばならない、ということをお私たち人類に教えたそうです。そうしますと、恐らく、献体というある意味で「究極の行為」を決断し、それを受け入れることは、ご本人だけでなくご家族の皆さまにとりましても、私のような小賢しい理屈を辿るのではなく、もっと大きくて深い何か、「生と死」の清らかなイメージのようなものに包まれてのことだろうと思います。初めて遺体と向き合う医学生が必ずや感ずるであろうもの、それは「個人の生と死」、それから「人類の連帯」というヴィジョンなのだと思わしますが、それを肌で捉えるまでは、私も、献体という地点にまでは達することができないのではないかと個人的には恐れます。しかしまた同時に、本日、ここで皆さまと過ごす数時間が、私をそのような地点にまで導いてくれるのではないかと、とも期待します。

尊い意志とお気持ちの集う「しらゆり会」総会の場で、まことにつまらない私ごとを申し上げました。皆さまには、心定まらぬ未熟者の言として、お許し下されば幸いです。

それでは、最後に、皆さま方のご健康としらゆり会の益々のご発展を祈念申し上げ、簡単ながら私の挨拶とさせていただきます。

本日はお招きいただき有難うございました。